午前十時の映画祭14

デジタルで甦る永遠の名作

プライベート・ライアン 4K
スターリングラード 4K
カジノ 4K
スカーフェイス 4K
ネットワーク
チャイナタウン 4K
ひまわり
妖星ゴラス 4K
海底軍艦 4K
戦場にかける橋 4K
ドクトル・ジバゴ 4K
アメリカン・グラフィティ 4K
雨に唄えば

©1970 – COMPAGNIA CINEMATOGRAFICA CHAMPION(IT) – FILMS CONCORDIA(FR) – SURF FILM SRL. ALL RIGHTS RESERVED.

●上映劇場

「午前十時の映画祭14」は、以下の劇場に於いて開催され、作品はグループA・Bで交互に上映されます。（※但し『ひまわり』を除く）

GROUP A

北海道	札幌シネマフロンティア	静岡	TOHOシネマズ 浜松
宮城	TOHOシネマズ 仙台	愛知	ミッドランドスクエア シネマ
栃木	ユナイテッド・シネマ アシコタウンあしかが	石川	イオンシネマ金沢
茨城	シネプレックスつくば	三重	イオンシネマ津
埼玉	ユナイテッド・シネマ ウニクス秩父	大阪	高槻アレックスシネマ
千葉	TOHOシネマズ 市原	大阪	大阪ステーションシティシネマ
千葉	TOHOシネマズ 市川コルトンプラザ	大阪	TOHOシネマズ 泉北
東京	グランドシネマサンシャイン 池袋	兵庫	OSシネマズ神戸ハーバーランド
東京	TOHOシネマズ 日本橋	和歌山	ジストシネマ和歌山
東京	TOHOシネマズ 立川立飛	島根	T・ジョイ出雲
東京	TOHOシネマズ 南大沢	香川	イオンシネマ宇多津
神奈川	TOHOシネマズ 海老名	福岡	kino cinéma 天神
神奈川	TOHOシネマズ 小田原	福岡	ユナイテッド・シネマ なかま16
山梨	TOHOシネマズ 甲府	長崎	TOHOシネマズ 長崎
長野	松本シネマライツ	大分	TOHOシネマズ 大分わさだ
静岡	シネマサンシャインららぽーと沼津	鹿児島	天文館シネマパラダイス

GROUP B

岩手	中央映画劇場	岐阜	TOHOシネマズ 岐阜
宮城	イオンシネマ新利府	愛知	ユナイテッド・シネマ 豊橋 18
山形	MOVIE ON やまがた	愛知	ミッドランドシネマ 名古屋空港
栃木	TOHOシネマズ 宇都宮	富山	TOHOシネマズ ファボーレ富山
埼玉	MOVIX三郷（～11/30）	京都	京都シネマ
埼玉	TOHOシネマズ ららぽーと富士見	大阪	TOHOシネマズ くずはモール
埼玉	こうのすシネマ	大阪	TOHOシネマズ なんば
千葉	MOVIX 柏の葉（9/27～）	大阪	TOHOシネマズ ららぽーと門真
千葉	シネマサンシャインユーカリが丘	兵庫	TOHOシネマズ 西宮 OS
千葉	京成ローザ⑩	岡山	TOHOシネマズ 岡南
東京	TOHOシネマズ 錦糸町 オリナス	広島	福山駅前シネマモード
東京	TOHOシネマズ 新宿	愛媛	シネマサンシャイン重信
東京	イオンシネマ多摩センター	福岡	小倉コロナシネマワールド
神奈川	TOHOシネマズ ららぽーと横浜	福岡	TOHOシネマズ ららぽーと福岡
神奈川	TOHOシネマズ 上大岡	佐賀	イオンシネマ佐賀大和
長野	長野グランドシネマズ	熊本	TOHOシネマズ はません
静岡	静岡東宝会館	宮崎	宮崎キネマ館

●上映スケジュール

GROUP A

上映期間	作品タイトル
9/27（金）～10/10（木）	プライベート・ライアン 4K
10/11（金）～10/24（木）	スターリングラード 4K
10/25（金）～11/7（木）	カジノ 4K
11/8（金）～11/21（木）	スカーフェイス 4K
11/22（金）～12/5（木）	ネットワーク
12/6（金）～12/19（木）	チャイナタウン 4K
12/20（金）～2025/1/2（木）	ひまわり
1/3（金）～1/16（木）	妖星ゴラス 4K
1/17（金）～1/30（木）	海底軍艦 4K
1/31（金）～2/13（木）	戦場にかける橋 4K
2/14（金）～2/27（木）	ドクトル・ジバゴ 4K
2/28（金）～3/13（木）	アメリカン・グラフィティ 4K
3/14（金）～3/27（木）	雨に唄えば

GROUP B

上映期間	作品タイトル
9/27（金）～10/10（木）	スターリングラード 4K
10/11（金）～10/24（木）	プライベート・ライアン 4K
10/25（金）～11/7（木）	スカーフェイス 4K
11/8（金）～11/21（木）	カジノ 4K
11/22（金）～12/5（木）	チャイナタウン 4K
12/6（金）～12/19（木）	ネットワーク
12/20（金）～2025/1/2（木）	ひまわり
1/3（金）～1/16（木）	海底軍艦 4K
1/17（金）～1/30（木）	妖星ゴラス 4K
1/31（金）～2/13（木）	ドクトル・ジバゴ 4K
2/14（金）～2/27（木）	戦場にかける橋 4K
2/28（金）～3/13（木）	雨に唄えば
3/14（金）～3/27（木）	アメリカン・グラフィティ 4K

■各作品2週間上映 ※4K表記の作品は4Kレストア素材です。劇場により4K上映ができない場合もあります。ご覧になる劇場に直接お問い合わせのうえご確認ください。

絶賛開催中！2025年3月27日（木）まで！

上映開始時間と料金は各劇場に確認をお願いします。

※劇場ごとに上映開始時間と料金が異なります。詳しくは各劇場へお問い合わせいただくか、公式サイトでご確認ください。

【作品選定委員】襟川クロ　戸田奈津子　町山智浩　笠井信輔　武田 和（敬称略）

主催／公益財団法人 川喜多記念映画文化財団　一般社団法人 映画演劇文化協会　運営／「午前十時の映画祭」実行委員会

後援／文化庁、モーション ピクチャー アソシエーション、一般社団法人 外国映画輸入配給協会、一般社団法人 日本映画製作者連盟

協力／(有) アレックス、(株) イウォレ京成、イオンエンターテイメント (株)、(株) オー・エンターテイメント、OS (株)、大阪ステーションシネマ共同事業体、(株) 北原、kino cinéma、(株) 京都シネマ
(株) コロナワールド、佐々木興業 (株)、札幌シネマフロンティア、(株) 松竹マルチプレックスシアターズ、(株) 中央映画劇場、(株) ティ・ジョイ、(株) 天文館、(株) 東京楽天地
TOHOシネマズ (株)、中谷商事 (株)、中日本興業 (株)、日映 (株)、(株) フューレック、NPO法人宮崎文化本舗、(株) MOVIE ON
ユナイテッド・シネマ (株)、東宝東和 (株)、(株) エイガ・ドット・コム、(株) シネマコネクト

川喜多記念映画文化財団　一般社団法人 映画演劇文化協会　YouTube　詳しくは公式サイトで！ asa10.eiga.com

ミックス 紙 | 責任ある森林管理を支えています FSC® C169462 www.fsc.org

「スターリングラード」© MP Film Management DOS Productions GmbH & Co. KG. All Rights Reserved /「プライベート・ライアン」TM & Copyright ©1998 by Paramount Pictures and Dreamworks L.L.C. and Amblin Entertainment.
「スカーフェイス」©1983 UNIVERSAL CITY STUDIOS. All Rights Reserved. /「カジノ」©1995 Universal City Studios and Syalis Droits Audiovisuels. All Rights Reserved.
「チャイナタウン」©Paramount Pictures. All Rights Reserved. /「ネットワーク」©1976 Turner Entertainment Co. and Metro-Goldwyn-Mayer Studios Inc. All Rights Reserved.
「ひまわり」©1970 – COMPAGNIA CINEMATOGRAFICA CHAMPION(IT) – FILMS CONCORDIA(FR) – SURF FILM SRL. ALL RIGHTS RESERVED.
「海底軍艦」©1963 東宝 /「妖星ゴラス」©1962 東宝 /「ドクトル・ジバゴ」©1965 Turner Entertainment Co. All rights reserved. /「戦場にかける橋」©1957, renewed 1985. ©1995 Columbia Pictures Industries, Inc. All Rights Reserved.
「雨に唄えば」©1951 Tuner Entertainment Co. ©2000 Warner Bros. Entertainment Inc. All rights reserved. /「アメリカン・グラフィティ」©1973 Universal Studios. All Rights Reserved.

◆映画と戦争

「午前十時の映画祭 14」では、戦争を題材とした映画を数多く上映する。多くの人が望んでいないにも関わらず、戦禍は今も世界で止まない。そして、いつの時代も命の危機に直面するのは最前線にいる名もなき兵士たちや一般市民である。会ったこともないライアン二等兵を連れ戻せという命令を受ける兵士たちを描いた『プライベート・ライアン』(1998)。銃の腕前を見込まれた猟師出身の狙撃兵が上層部の思惑の中で生き抜く『スターリングラード』(2001)。前線で行方不明となった夫を捜す、ウクライナのひまわり畑のシーンが美しい『ひまわり』(1970)。理不尽がまかり通る捕虜収容所を舞台に戦争の狂気を描いた『戦場にかける橋』(1957)。そして第一次世界大戦とロシア革命の大きな波の中で翻弄される主人公の愛と哀しみの物語『ドクトル・ジバゴ』(1965)。こうした過去の戦争を疑似体験させてくれる映画をぜひ見ていただきたい。怪しい大義名分などに惑わされることなく、戦争が最悪の選択肢であることを実感していただきたい。スピルバーグが見せてくれる『プライベート・ライアン』冒頭のノルマンディー上陸作戦のシーンは、あまりのリアルさに驚くだろうが、戦争への抑止力にはなるのではないか。あのシーンを見て、銃を持って戦いたいと思う人はまずいないだろうから。

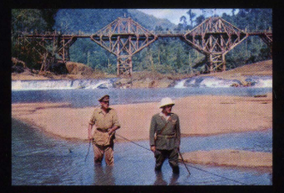
プライベート・ライアン 4K
監督:スティーヴン・スピルバーグ
出演:トム・ハンクス/マット・デイモン
エドワード・バーンズ/トム・サイズモア
■1998年/アメリカ/カラー/169分

スターリングラード 4K
監督:ジャン=ジャック・アノー
出演:ジュード・ロウ/ジョセフ・ファインズ
レイチェル・ワイズ/エド・ハリス
■2001年/アメリカ・ドイツ・イギリス・アイルランド/カラー/131分

◆スカーフェイスって誰?

今回上映される二本のギャング映画、『スカーフェイス』(1983)と『カジノ』(1995) はよく似た作品で共にギャングの栄枯盛衰を描いている。が、この二本、成り立ちは全く違う。『カジノ』は『レイジング・ブル』(1980)から始まり、近作『キラーズ・オブ・ザ・フラワームーン』(2023)まで続く、マーティン・スコセッシ監督の「アメリカの闇を描く実録映画シリーズ」(勝手に名付けました)の一本で、登場人物はほぼほぼ実在する。それに対し『スカーフェイス』はハワード・ホークスが監督した『暗黒街の顔役』(1932 原題は“Scarface”)のリメイク作品なのだ。ちなみにスカーフェイス(傷のある顔)というのはアル・カポネのあだ名である。『暗黒街の顔役』はカポネが脱税裁判で有罪になった後に作られ、カポネと思しき主人公をかなり脚色してドラマチックに描いた映画だ。『スカーフェイス』はストーリーとしては比較的忠実なリメイク作品なのだが、同じデ・パルマが監督した『アンタッチャブル』(1987) でカポネを演じたデ・ニーロと比べると、この映画のアル・パチーノはおよそ暗黒街の顔役としてのカポネのイメージはなく、暴走する無軌道な若者という青春ドラマ的な雰囲気だ。このことが公開当初に不評を買った理由で、「名匠ハワード・ホークスの作品とはまるで違う」というようなことを言われることとなる。しかしながら、その後、評価は一転し、成り上がっていく主人公の生き様に共感する若者が支持し、アル・パチーノの代表作と言われるようになった。

カジノ 4K
監督:マーティン・スコセッシ
出演:ロバート・デ・ニーロ/シャロン・ストーン
ジョー・ペシ/ジェームズ・ウッズ
■1995年/アメリカ/カラー/178分



戦場にかける橋 4K
監督:デヴィッド・リーン
出演:ウィリアム・ホールデン/アレック・ギネス
ジャック・ホーキンス/早川雪洲
■1957年/イギリス・アメリカ/カラー/161分

ドクトル・ジバゴ 4K
監督:デヴィッド・リーン
出演:オマー・シャリフ/ジュリー・クリスティ
ジェラルディン・チャップリン
■1965年/アメリカ・イタリア/カラー/200分

◆『戦場にかける橋』の原作者

『戦場にかける橋』と『猿の惑星』(1968) は同じ原作者の作品である。フランスの作家、ピエール・ブール。彼は第二次大戦中、レジスタンスに身を投じ、アジアで活動していたが、捕まって、日本軍の捕虜収容所に入れられたという経歴の持ち主だ。この体験からブールの日本人に対する怒りはとどまることを知らず、それが、そのまま彼の著作となっている。『戦場にかける橋』はそのものズバリ、彼が日本軍から受けた捕虜への虐待行為を描いている。『猿の惑星』も映画化された作品からはあまり感じられないかもしれないが、原作では、人間から支配者の座を奪ったモノマネに長けた猿たちというのが、日本人のことを揶揄しているのが明確にわかる。欧米の技術を模倣し、安い値段で売ることで成長していった当時の日本人を猿になぞらえているわけだ。他にも、「カナシマ博士の月の庭園」という SF 短編小説は、世界の国々が月への一番乗りを競っている時に、月に行くことはできても、帰る手段が難しく、各国が躊躇している中、日本のカナシマ博士が帰ることを考えずに月に行き、一番乗りを達成する。博士は月面上に日本庭園を作り、死ぬという話だ。言うまでもなく、特攻隊に対する痛烈な皮肉である。いやあ、ピエール・ブールの執念や恐るべし。

◆東宝特撮映画てんやわんや

日本の特撮の第一人者といえば、もちろん円谷英二である。円谷によって、『ハワイ・マレー沖海戦』(1942) など、高度な特殊撮影を使った映画が生まれ、そして『ゴジラ』(1954) でついに特撮映画というジャンルが確立するのだ。ここから「ゴジラ」「ラドン」「モスラ」といったお馴染みの怪獣たちが毎年のように大活躍と言いたいところだが、実際には東宝特撮映画はその方向を模索して異種格闘技のような状態に突入する。『ゴジラ』の翌月に公開された『透明人間』(1954) は着ぐるみ特撮の『ゴジラ』とは違い、光学合成を主に使った特撮作品である。この流れは『美女と液体人間』(1958)『電送人間』(1960)『ガス人間第1号』(1960)、この三本を変身人間シリーズと呼ぶらしいが、更に『マタンゴ』(1963)と続く。そして宇宙を舞台にした近未来SFとして『地球防衛軍』(1957)『宇宙大戦争』(1959)『妖星ゴラス』(1962) があり、更に近未来ではないが、SF 冒険活劇である『海底軍艦』(1963) があるのだ。そして忘れてはいけないのは特撮を使った反戦映画『世界大戦争』(1961) である。これだけの作品群があって、当たり前に『モスラ』(1961)『キングコング対ゴジラ』(1962)『モスラ対ゴジラ』(1964)『三大怪獣 地球最大の決戦』(1964) があるのだ。東宝特撮映画大繁盛、円谷英二フル回転である。その後、1966 年から始まるテレビ番組「ウルトラ Q」「ウルトラマン」の大成功により、怪獣映画ブームが起こり、特撮映画はイコール「怪獣映画」となっていくのだった。

スカーフェイス 4K
監督:ブライアン・デ・パルマ
出演:アル・パチーノ
ミシェル・ファイファー
■1983年/アメリカ/カラー/170分

テキスト/武田 和(作品選定委員)

チャイナタウン 4K
監督:ロマン・ポランスキー
出演:ジャック・ニコルソン/フェイ・ダナウェイ
ジョン・ヒューストン/バート・ヤング
■1974年/アメリカ/カラー/132分

◆フェイ・ダナウェイが駆け抜けた 1970 年代

舞台女優としてスタートしたフェイ・ダナウェイは、後に『スケアクロウ』(1973) を監督するジェリー・シャッツバーグと婚約していた時期もあった。その後、映画女優に転身し、『俺たちに明日はない』(1967) で一気にスターとなる。次作となる『華麗なる賭け』(1968) でのスティーヴ・マックィーンとのがっぷり四つの演技は見事だった。『チャイナタウン』(1974)『タワーリング・インフェルノ』(1974)『コンドル』(1975)『ネットワーク』(1976) と立て続けにヒロインを務め、ジャック・ニコルソン、ポール・ニューマン、ロバート・レッドフォード、ウィリアム・ホールデンと相手役もこれまた豪華絢爛、キャリアの頂点を極めたと言えよう。しかし、『愛と憎しみの伝説』(1981 日本劇場未公開) が大失敗。勢いは止まってしまった。『ネットワーク』でアカデミー主演女優賞を取ったのだが、その年の作品賞は『ロッキー』だった。アメリカン・ニューシネマに終止符を打った作品とも言われる『ロッキー』の登場は『俺たちに明日はない』でボニー・パーカー役を演じ、「新しい時代の扉を開いた女優」である彼女にとっては、時代の潮目が変わったということだったのではなかろうか。ちなみに、この年のアカデミー賞候補作品は『ロッキー』『大統領の陰謀』『タクシードライバー』など、有力作が目白押し。主演男優賞は『タクシードライバー』のデ・ニーロかと思わせたがノミネート後に心不全で急死した『ネットワーク』のピーター・フィンチが受賞。更にわずか5分半くらいしか登場シーンのない『ネットワーク』のベアトリス・ストレイトが助演女優賞を受賞。番狂わせが多い年となった。助演女優賞は『タクシードライバー』のジョディ・フォスターかとも予想されていたが、当時13歳という年齢と映画の内容がネックになったのかもしれない。

妖星ゴラス 4K
監督:本多猪四郎
出演:池部 良/白川由美/久保 明
水野久美/平田昭彦/佐原健二
■1962年/日本/カラー/88分

海底軍艦 4K
監督:本多猪四郎
出演:高島忠夫/藤山陽子/藤木 悠
佐原健二/小泉 博/田崎 潤
■1963年/日本/カラー/94分

ネットワーク
監督:シドニー・ルメット
出演:フェイ・ダナウェイ/ウィリアム・ホールデン
ピーター・フィンチ/ロバート・デュヴァル
■1976年/アメリカ/カラー/121分

ひまわり
監督:ヴィットリオ・デ・シーカ
出演:ソフィア・ローレン
マルチェロ・マストロヤンニ
■1970年/イタリア/カラー/107分

◆映画監督あれこれ

働き方改革が進められ、映画の撮影現場も「適正化」が問題となっている。古い徒弟制度が色濃く残る現場の状況は、先輩の言うことは絶対というような世界で、なかなか厳しいが、労働環境が改善されなければ新しい作り手も生まれてこないだろう。また監督のパワハラも大きな問題である。「良い作品を作るために」という意図はわかるが、そのために現場を疲弊させてはいけない。まあ、そうは言いながら、「午前十時の映画祭」で取り上げる作品の監督たちの中には、パワハラエピソードに事欠かない人がいるのは事実である。逆に穏健派ももちろんいる。『妖星ゴラス』『海底軍艦』の本多猪四郎。『雨に唄えば』(1952) のスタンリー・ドーネン。『アメリカン・グラフィティ』(1973) では出演者であるが、後に監督となるロン・ハワードなどだ。ロン・ハワードが監督した『アポロ13』(1995) では、テレビで宇宙船の様子を見守る家族の役で、自身の父母兄妻の他、今やスターとなった娘のブライス・ダラス・ハワードも14歳で出演している。これが本当の「ファミリー映画」というわけだ。スタンリー・ドーネンは1998年のアカデミー賞で名誉賞を授与され、そのスピーチで「大切なことは撮影現場にちゃんと遅れずに行くこと、そしてみんなの邪魔をしないこと」と言って、場内を大爆笑させている。本多猪四郎は関係者が皆、現場で怒っているところを見たことがないと証言しているし、奥様に聞いた話でも、過酷な戦争体験をしているにもかかわらず、その事は一度も語ったことがないということだった。その人柄故に『影武者』(1980) では盟友である黒澤明の監督補佐を務め、年齢の離れた助監督たちとの間を取り持ったのだ。NHK の特番で『影武者』の現場密着番組が放映され、まだ撮影中だった黒澤監督はじめスタッフが皆でそれを見ていたときのこと。監督の横にチーフ助監督だった岡田文亮が座っていて、監督はテレビを見ながら「岡田君、僕はいつも君のことをあんなに怒鳴っているのかね」と尋ねたそうだ。「ええ、まあ」と言葉を濁した岡田だったが、監督は「いやあ、申し訳ない、明日から気をつけるよ」と言ったそうだ。そして翌日、もちろんセット内では黒澤監督の「岡田君!どうなってるんだ!」という怒号がいつものように響き渡っていたそうだ。これでは本多猪四郎の助けがどうしても必要になるわけで、事実『影武者』では黒澤明は本多猪四郎に共同監督というクレジットを出そうと提案している。それを固辞するのがまた本多猪四郎という人なのだが。

アメリカン・グラフィティ 4K
監督:ジョージ・ルーカス
出演:リチャード・ドレイファス/ロン・ハワード
ポール・ル・マット/ハリソン・フォード
■1973年/アメリカ/カラー/113分

雨に唄えば
監督:ジーン・ケリー/スタンリー・ドーネン
出演:ジーン・ケリー/ドナルド・オコナー
デビー・レイノルズ/ジーン・ヘイゲン
■1952年/アメリカ/カラー/103分